別紙２

平成２５年度大学コンソーシアムとちぎ　学生活動支援事業　報告書

機　関　名	宇都宮大学
団体等名	「バングラデシュのストリートチルドレンと私たち」実行委員会
学生代表者氏名 (所属・学年)	宇都宮大学 国際学部 国際社会学科 4年　庄司　萌
責任教職員氏名	宇都宮大学 国際学部 准教授　阪本 公美子

１．事業名	バングラデシュのストリートチルドレンと私たち ―映画「アリ地獄のような街」上映会・講演会―
２．実施時期	平成25年年11月17日(日)
３．実施場所	宇都宮大学　大学会館2F　多目的ホール、談話室
４．事業の内容等	【事業概要】 学生代表の庄司は、半年間バングラデシュのダッカ大学に交換留学をしており、その間多くのストリートチルドレンに出会った。彼らは時に目の光を失くしうつむく。しかし、苦しみを知っているからこそ本当の喜びや楽しさを知っており、時に彼らは世界で一番輝いて見える。そんな懸命に生きる子供たちの存在をより多くの人々に知ってもらいたいという思いから、本イベントを企画した。本イベントの目的は以下の2つである。 ① 貧しく苦しい状況下で抑圧されながらも、明るく懸命に生きるバングラデシュの子供たちの存在を一般市民に広く知ってもらうこと。 ②本イベントを通して、バングラデシュのストリートチルドレンと同様に社会の隅に追いやられた日本の子どもにも目を向けてもらうこと。 日本に帰国してから、バングラデシュのストリートチルドレンと環境は違えど同じように苦しむ子どもたちが日本にもいることに気が付いた。そのため、私たちにとっても身近な日本の子どもたちが抱える問題についても考えられる機会にした。 【事業内容】 本イベントは2部構成で、第Ⅰ部ではバングラデシュのストリートチルドレンについて、第Ⅱ部では日本の子どもたちについて考えた。同時に別室で子どもたちの笑顔の写真展も開催した。プログラムは以下である。 ＜第Ⅰ部＞ 13:00　開会 13:10　映画「アリ地獄のような街」」上映 14:40　休憩　バングラデシュのミルクティーでティータイム 14:55　「エクマットラ」インターン生講演会 講師：島根県立大学総合政策学部４年 門上貴（かどかみ　たかし）氏 15:40　休憩

＜第Ⅱ部＞
15:55　ワークショップ
16:25　日本の現場からの声
コメンテーター：
・自立援助ホーム「マルコの家」　野原知子（のはら・ともこ）氏
・株式会社キッズコーポレーション　代表取締役社長&幼稚園理事長
大塚雅人（おおつか・まさと）氏
17:00　閉会

＜同時開催　子どもたちの笑顔の写真展＞
カメラマン：長田太樹（おさだ・たいじゅ）
白鴎大学教育学部

第Ⅰ部では、まず映画「アリ地獄のような街」を上映し、バングラデシュのストリートチルドレンがどのように生まれ、生きているのか、その背景を知っていただいた。バングラデシュのストリートチルドレンの多くは地方出身である。地方の実家における虐待や経済的貧困から逃れるために、なけなしのお金を持って首都ダッカへ出てくる子どもが多い。ダッカへ来たのはいいがお金のない彼らは、大人に利用され、麻薬の運び人などの危険な仕事をさせられることもある。生きるためのお金を得るために、また同じような境遇の仲間がいるために、なかなか闇の世界から抜け出せない。そしてバングラデシュ国内の経済格差、特に都会と地方の経済格差は一向に縮まらず、子どもたちはどんどん都会へ出てきてストリートチルドレンは増えるばかりである。

この映画を制作したのはバングラデシュでストリートチルドレンを支援する現地のNGO「エクマットラ」である。「エクマットラ」は、青空教室・シェルターホーム・職業訓練施設の運営などストリートチルドレンに対する支援と、映画などの映像メディアによる市民への啓発活動の2つを軸に活動している。映画の上映料の半分が、活動費に充てられる。

次に、「エクマットラ」で1年間インターンをしてきた島根県立大学総合政策学部4年生の門上貴氏に講演していただいた。バングラデシュの基本的なデータや世界に誇れる文化について、エクマットラの活動やインターンの経験、そこで悩んだことなどについてお話いただいた。その後の参加者からの質問も積極的に行われ、「エクマットラ」の使命や対象者に関する鋭い質問も出た。

第Ⅱ部では、まずワークショップを行った。このワークショップの目的は、日本の子どもたち、特にヤンキーと呼ばれるような路上や駅、コンビニの前にたむろしているような子供たちに対して私たちが持つ偏見、ステレオタイプに気づいてもらうことである。路上に居場所を求める日本の子どもたちは、虐待や周りの人間の無理解によって、本来安心できるはずの家庭や学校に居場所がなくなり、路上に出てくる。この構造は、家庭での虐待により首都ダッカへ出てくるバングラデシュのストリートチルドレンとよく似ている。両者とも、「居場所」を失い、行き着いたのが路上だったのである。ま

	た、逃げる場所は、路上だけではなく自分の部屋である場合もある。いわゆる「引きこもり」である。逃げ場がなく、ただひらすら我慢して周りの人に認められようと「良い子」に振る舞い、そのストレスがおねしょなどの形で表れる子どももいる。このような子どもたちに対して、私たちはステレオタイプを持っていないだろうか。バングラデシュのストリートチルドレンは「かわいそう」だけど、日本のヤンキーは「みっともない」「怖い」。それぞれの子ども達がどうして現状に至ったのか考えたことがあるだろうか。それを自問してもらうワークショップにした。 　ワークショップではどのグループも熱い議論が交わされていたが、時間が短く、グループの中でも話せない人が出てしまった事が反省点だった。 　ワークショップの終わりには、企画メンバーの一人から「日本にもストリートチルドレンはいるのではないか」という自身の研究について話をした。内容は既述したが、日本のヤンキーや引きこもり、またかぎっ子と言われる友達の家を転々とする子どもにも、ストリートチルドレンの定義が当てはまるのではないかという主張である。新しい考え方の主張であるため、参加者の方がすぐ受け入れることができたのかは分からないが、伝えたい思いは確実に届いたと思う。 　次に、日本の子ども達と直に向き合ってきたお二方からお話をいただいた。 　お一人目は、社会福祉法人イースターヴィレッジ　自立援助ホーム「マルコの家」野原知子氏である。「マルコの家」は様々な理由で家庭から援助を受けられない15歳～20歳の子どもたちの就労自立を支援している。「マルコの家」に来るほとんどの子どもたちは虐待により家庭での居場所を失い、駅前や路上に出てきたところを補導され、最終的に「マルコの家」にたどり着いたという。虐待を受けていたせいで、今でもなかなか自分を肯定することができない子どもが多い。それでも子どもたちは「マルコの家」に住みながら働き、生活費をきちんと支払いながら自立を目指す。野原氏の思いのこもったお話に心を打たれた参加者は多かったように思う。 　お二人目は、株式会社キッズコーポレーション取締役社長、大塚雅斗氏である。株式会社キッズコーポレーションは、「子どもたちの教育を通して未来を育み、社会を創り、社会に貢献する会社」という理念のもとに、「自由保育」を行う保育園・幼稚園の運営をしている。会社の設立までのお話や、「何より子どもを最優先」というキッズファーストの考え方をお話してくださった。子どもの好きなようにさせることは「甘やかし」と言われたり「わがままになる」というイメージを持たれたりすることが多い中、参加者にとって新しい考え方を提示することができた。 　談話室で同時開催した「子どもたちの笑顔の写真展」では、白鴎大学の長田太樹氏が世界16か国をまわって撮りためた写真を展示した。どれも子どもたちの笑顔の写真である。映画「アリ地獄のような街」は重く暗いテーマを扱っているため、バングラデシュに対しマイナスのイメージだけを持たれがちになるが、本当のバングラデシュには、明るく親切な人たち、笑顔いっぱいの子どもたちがいる。参加者がバングラデシュに対して持つマイナスイメージを少しでも和らげられればと思い開催した。また、談話室ではバングラデシュの大衆的な飲み物チャー（ミルクティー）とビスケットを配った。多くの参加者が訪れ、大盛況だった。

５．事業の成果と今後の課題	【事業の成果】 　映画の感想として、参加者からは「ショッキングだった」「本当にこんな世界があるのか」という感想が挙がった。また、全体の感想から考えても、バングラデシュのストリートチルドレンの存在を知ってもらうことと、日本の子どもたちに目を向けてもらうことの2つの目的は達成できたと思う。このイベントを通してバングラデシュのストリートチルドレンの支援者が増えたとか、ボランティアに行く人が増えたというような目に見える大きな変化はなかなかないだろうが、普段身近な子どもに接する時の意識が変わったとか、自分の内面での小さな変化が起こることを期待している。 【今後の課題】 　まず、参加者の立場になって企画作りをすることである。今回は1回のイベントにたくさんの内容を盛り込みすぎたため、各プログラムの時間が短くなってしまった。特に、参加者が話すことができるワークショップは貴重なアウトプットの時間であったのに、時間が短いために自分の意見を話すことができない参加者も出てしまった。自分たちのやりたいこと、伝えたいことを優先してしまったが、どうすれば参加者により分かりやすく伝わるか、面白く感じるか、満足できるかをもう少し考えるべきだった。 　また、バングラデシュのストリートチルドレンや日本の子どもたちの問題を知ってもらい、協力者を増やそうとするのならば、一度のイベントだけでは足りない。伝えられる情報に限界があるし、何よりすぐに忘れられてしまう。何度も何度も繰り返し様々な方法を使って啓発していく必要がある。本イベントは、子どもたちのことを知ってもらうきっかけとしては成功したかもしれないが、今後もう少し踏み込んだ内容のイベントを開催するなどして、活動を継続していく必要がある。

（注）１．記述が枠内に収まらない場合は、枠を拡大してください。
２．事業内容がわかるような資料や写真などがあれば添付してください。
報告書（添付書類を含む）はＡ４判５枚以内にまとめてください。
３．この報告書は、各関係機関等に公表するともに、大学コンソーシアムとちぎのホームページへの掲載を考えております。また、次年度以降の学生活動支援事業に役立てていきたいと思います。

第Ⅰ部　門上氏講演の様子

写真展の様子

第Ⅱ部　ワークショップの様子